

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：16102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370219

研究課題名(和文) 『栄花物語』本文の変容と再構築についての研究

研究課題名(英文) A Study of Modifications and Reconstructions in the Original Text of Eiga Monogatari

研究代表者

小林 明子(小島明子)(KOBAYASHI (KOJIMA), Akiko)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：60279015

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、平安時代に成立した王朝歴史物語『栄花物語』の本文享受と再創造に関する探求である。『栄花物語』の伝本の中で、従来、等閑視されていた「異本系統」に分類される富岡本を取り上げ、本文の増補・削除・改変の具体相を抽出し、その属性を明らかにした。また、旧知の伝本「古本系統」「流布本系統」、そして新出の学習院大学本の三系統と「異本系統」との相互関係を検討し、「異本系統」が生み出された歴史的・文化的意義の解明を試みている。

研究成果の概要(英文)：This study explores Eiga Monogatari, an epic of dynastic storytelling created in the Heian Period, and examines its recreation and reception. Among the original text of Eiga Monogatari, this study focuses upon the Tomioka family group, as classified in the “Alternative Manuscripts” group, the variation of which had been ignored in prior scholarship. This study extracted the specificity of the augmentations, omissions and alterations of the texts, and it clarified their attributes. This study also examines the relationship of the “Alternative Manuscripts” with the three categories of the ancient manuscripts in the “Old Book” group, the “Popular Editions” group, and the newly-discovered Gakushuin University group. In doing so, this study attempts to reveal the cultural and historical significance that contributed to the creation of the “Alternative Manuscripts” group.

研究分野：日本中古文学

キーワード：栄花物語 歴史物語 本文享受 史観 藤原道長 藤原頼通 禎子内親王 後三条天皇

1. 研究開始当初の背景

『栄花物語』の諸伝本は、「古本系統」、「流布本系統」、「異本系統」の三系統に大別されるが、正編30巻と続編10巻からなる「古本系統」、「流布本系統」が研究に用いられ、正編のみで完結したと考えられる「異本系統」は校異に用いられる程度であった。特に、「古本系統」の代表である梅沢本(三条西家旧蔵)は、鎌倉時代中期写という伝本の古さ、三条西家証本としての由緒の正しさの二点から最善本とみなされ、近代におけるほぼすべての校注本がこれを底本とする。

ところが、近年の久保木秀夫氏の論考『『栄花物語』本文再考 西本願寺本を中心とする』(『中古文学』80号、2007年)は、こうした固定概念に警鐘を鳴らした。梅沢本が巻1~巻20にあたる大型本十帖と、後半の巻21~巻40にあたる枳形本七帖の取り合わせ本であること、また後半の枳形本が「流布本系統」に属する西本願寺本に極めて近いことを指摘し、今後の課題として『栄花物語』各伝本の見直しの必要を提示している。

また、中村有里氏は「学習院大学文学部日本語日本文学科所蔵『栄花物語』の本文 その性格と価値」(『中古文学』89号、2012年)の論で、古本系統、流布本系統、異本系統のいずれにも属さない学習院本の紹介をなしている。

このように『栄花物語』の伝本研究は新たな局面を迎えているのであり、本研究もその一端に位置するものである。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、従来、単独で研究対象とされることが皆無に近かった「異本系統」の富岡甲本・乙本について、その属性の解明、および「異本系統」と他系統の伝本との相互関係の解明をめざす。

(2) 従前の諸本研究が、作品の研究に拠るべき最善本を見出すことが主目的であったことに対し、本研究が立脚するのは、「異本」を生み出す過程そのものが歴史物語の受容であり、新たな創造であるという視点である。『栄花物語』の変容の具体相を明らかにした上で、王朝歴史物語の再構築という営為のもつ文化的・歴史的意義について考究する。

3. 研究の方法

(1) 「異本系統」の完本は富岡甲本・乙本であるが、富岡甲本は鎌倉時代後期の写本と見られ、また富岡乙本はそれよりやや後のものとされている。本研究では、主として富岡甲本を用い、「古本系統」「流布本系統」と比較して、顕著な増補記事・削除記事・書き換え記事を抽出し、その特徴を調査する。

(2) 「異本系統」と他系統の伝本との相互関係の解明について調査を広げてゆく。また、新出の学習院大学文学部日本語日本文学科

所蔵本は、これまでに知られている三系統とは異なる本文であることから、これについても富岡本との関係を調査する。

(3) 上述の(1)(2)の調査研究を踏まえ、富岡本の祖本の成立年代・成立圏を統合的に考察してゆく。そして、その問題と不可分に絡み合うと思われるのが、続編十巻を切り離し、正編三十巻のみで『栄花物語』を完結させた富岡本の祖本作者の意図であり、続編の叙述意識と富岡本の叙述意識の比較・検討をなすことで、富岡本の位置づけを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 正編・続編40巻の「古本系統」「流布本系統」に対して、30巻からなる正編のみの「異本系統」の富岡本は、粗々いくつかの特徴を指摘することができる。

第一は、収載和歌の関しての異同である。和歌一首単位の増補がなされる箇所、あるいは作者の書き換えが認められる箇所があり、加えて句・単語単位での異同は相当数となる。

第二は、記事の書き換えがなされる箇所があることである。

第三は、細かな箇所で見られる記事の削除である。語単位のもの、句単位のもの、文単位のものとなつて様々なレベルが認められるがおおよそ全体としては、富岡本は「古本系統」「流布本系統」よりも表現を簡潔にする方向で本文が変化している。

第四に、上述の第三と相反するような動きであるが、富岡本にはごく限られた箇所に見える大きな増補本文が存在する。

これらの傾向を踏まえ、まずは富岡本30巻の中で特に異同が大きいと認められる巻27~巻30を取り上げ、富岡本の異同状況を調査した。これは、富岡本の全容を解明するためには、異同が顕著な巻でその傾向をつかむことがその糸口となろうとの見通しによる。

巻27~巻30の叙述範囲は、万寿2~4年(1025~27)の凝縮された期間であるが、そこで増補されるのは藤原道長・頼通に関する記事である割合が高いことが見てきた。しかも特に注目すべきは、道長の後継者である頼通であり、その描写の補入によって、言動・性格などの麗質が賛美される箇所が増幅することがわかる。さらには、春宮敦良(のちの後朱雀天皇)に入侍する禎子内親王を懇切に後見する道長・頼通の姿の描写が、他本に比して富岡本ではより一層強調される叙述傾向を抽出できた。

〔論文〕

(2) 続いて、富岡本30巻全体の詳細な調査に着手し、その改修の方向性を検討した。

まずは資料の参照による改修を検討したところ、『紫式部日記』を参考に作られた記事について、富岡本が当該日記を参照し直し、よりその記述に添うよう改修をなした箇所が指摘できた。また『大鏡』『後拾遺和歌集』

など、『栄花物語』正編が作られた時期には成立していなかった資料を参照して記事を書き換えた箇所、あるいは年次考証をし直して、記事を正確にした箇所などが散見した。歴史物語の異文発生要因の一つに、本文を享受する段階において、歴史的事象を調べ注書した勅物などが本文に取り込まれてしまうことがあり得るが、富岡本の場合もそれに相当すると考えられる。

次に巻 27～巻 30 で見られた本文増補と方向性を同じくするものが、それ以前の巻にも存在することを確認した。しかしながら、こうしたかなり大きな記事増補でなくとも、富岡本がなす細かい記事増補も見逃せない。例えば、巻 17 の「金堂供養の祿」を記載した記事において、僧への祿の提供者を富岡本は補っているが、実はそれらは公家の漢文日記に見えない人物であった。つまり富岡本は、道長の繁栄を支える子女たちを網羅的に数え上げて記載するというかたちの増補をなしているのであった。

ただし、道長の子であるいは孫であってもそこにさらなる選択がなされていた。その例が頼通の長男であった通房の記事である。巻 24 の巻末に位置するその有様を描く部分は、富岡本によって削除されている。その結果、巻 24 は道長女の尚侍嬪子（春宮敦良妃）の安産祈禱の記事で閉じられる。これは通房が長久 5 年（1044）に 20 歳で薨去することと無関係ではないと思われる。通房亡き後は、長久 3 年（1042）に誕生した師実が頼通嫡男となるのであり、富岡本の改修時期において通房を重んじる姿勢がかなり希薄化していることの反映と見なされるのである。

これと同様に、道長と疎遠な人物と言える城子（三条天皇の皇后）記事にも改変が見取れる。富岡本はその一連の葬送の儀を描く巻 25 において、城子腹の禊子内親王は殯が行われた西の院には赴かなかつたとし、また同様に城子腹の小一条院も西の院には籠もらず、そこに通うのみで済ませた、と記事を書き換えていることがわかるのである。

加えて、富岡本が削除したものとして、巻 9 の一条天皇辞世歌も挙げられる。この辞世歌は『御堂閑白記』『権記』にもいくらか歌句の異同がありながら書き留められているものであり、実は『権記』は「其御志在寄皇后」と記している。つまり道長女で一条天皇の中宮であった彰子宛ではなく、道隆女で一条天皇皇后であった定子に宛てた歌と、藤原行成は解していたらしく、問題を含みもつ和歌と言える。富岡本はおそらくこの点を意識して、当該歌を削除する改修をなしたと見なせるのである。

つまり、富岡本には、道長子女の網羅的列挙をなす増補、逆に道長子女を際立たせるべくなされた部外者の描写の削除、登場人物の行動の改変などの改修方向が指摘できるのである。『栄花物語』正編を受けた享受者が続編を付加したのであるが、それとはまった

く別の場において、富岡本は正編の改修によって自身の歴史観に叶った正編を作ろうとしたことが窺い知れることとなった。

〔論文〕

(3) 上述の(1)の調査の過程で、富岡本において頼通が禊子内親王の春宮敦良（のちの後朱雀天皇）の入侍を手厚く後見する様子を増補していることがわかったのであるが、史実上、頼通は後に禊子、およびその所生の後三条天皇と不和であったとされる。富岡本は、歴史的事実とは齟齬するような書き換えをなしていることとなるが、これはどのような意味をもつものか考察する必要がでてきた。そこで『今鏡』を中心に『栄花物語』『大鏡』との記載の相違を比較・検討してみた。

まず、歴史的には、皇室の中で複数の皇統が生まれることはしばしば起こり得るが、その際、不必要な軋轢を回避するため、嫡流の皇統の天皇に傍流の皇統の内親王が嫁すことがしばしば見られ、円融 一条流の後朱雀天皇と冷泉 三条流の禊子内親王もまさしくその組み合わせと確認できる。ただ過去のそうした婚姻例においては、後嗣に恵まれないケースがほとんどであったのだが、稀有にも両統の血を強く受け継ぎ、即位にまで至ったのが後三条天皇である。

しかし、そこに至るのは後年で、頼通は後朱雀天皇に養女の姫子を入内させて禊子に圧力を加えたらしく、それ故に参内できなくなる禊子を、『栄花物語』続編第一部の巻 34 は「入らせたまへとあれど、いかに思しめすにか、入らせたまはず」と描き、あくまで禊子本人の意志による行為とする。また続編第二部の巻 38 は「人の御もてなしにや、わが御心と入らせたまはざりしにや」として、そこに頼通の扱いも書き加え得る。一方、大鏡は「殿の御もてなし、かたはらいたくわづらはしくて、ひさしく入らせたまはず」と頼通の介入のみを直載に記す。

これらに対して、『今鏡』は禊子を御堂の「一つ御流れ」と扱い、道長の正統な後継の一族として禊子とその皇子・後三条天皇を捉えて描く箇所がある。が同時に、現実には道長薨去後、摂関家嫡流の後ろ盾を得られなかった後三条天皇の 12 歳～35 歳までの長い忍従の春宮時代をいくつもの逸話によって描出するのである。

さらに、『今鏡』はすべらぎの巻々で、他の帝については二巻ずつでその足跡を記載するのにもかかわらず、例外的に後三条天皇には三巻を割く。後三条紀は、その即位までを支えた摂関家傍流の能信の功績が明確に浮かび上がるように記事の配置がなされていることも読み解くことができた。

これらの検討によって、禊子・後三条天皇と頼通との関係の描き方には、それぞれの歴史物語作者の立ち位置が如実に反映されることが見えてきたのである。これは富岡本の改修の時期や改修の担い手を考察する上で

の視座となるものであった。

〔図書〕

(4) 研究の総括として富岡本が如何なる時に、如何なる場において成立したかを検討した。その改修の時期については、夙に松村博司氏の二段階成立説があり、大きな記事の異同が生まれた第一次改修は後冷泉天皇の御代(1045~1069)、和歌の増補などが行われた第二次改修は『千載和歌集』が本文の改修の資料となることから、同集の序文が成った文治3年および、卷子本が奏覧された翌文治4年(1188)以降とする。このうち、第二次改修の時期は首肯できるが、他方、第一次増補の時期に関しては疑義が生じている。

その理由として、まずは富岡本では、(1)の研究結果から富岡本の異同箇所、殊に増補箇所を禎子を庇護する頼通の姿が強調されることがわかったが、これは、梅沢本・西本願寺本などが有する続編(巻31~40)、特に続編第一部(巻31~37)のもつ歴史認識との差異が著しいことがある。続編第一部の最終記事は延久元年(1069)後冷泉天皇の御代の末年を描くが、そこでは頼通と禎子腹の春宮貞仁(のちの後三条天皇)との不和を書き留める。続編第一部は延久元年からほどなくして成立したとされるが、その時点の前後に富岡本の増補記事が書かれ得たとすることは難しいと考えられる。

また、富岡本に43例見られる「北政所」の語の使用時期の問題もある。これは「上」を書き換えた場合が32例、富岡本が独自に記事を補入した場合の11例があるが、語史の上で「北の政所」の語は11世紀中頃に初例が確認されていて、それが定着するのは11世紀末である。つまり、富岡本の改修時期は後冷泉天皇の御代より下の方がより蓋然性が高いことが挙げられる。

加えて、富岡本の富岡本増補には『大鏡』記事の影響が指摘できる点がある。これも富岡本の第一次改修が後冷泉天皇の御代とは捉え得ない証左と言える。

これらから、富岡本の改修は、尊仁が不遇の春宮時代を経て後三条天皇として登極した後、その皇子貞仁(のちの白河天皇)に摂関家嫡流の師実が養女・賢子を入侍させた延久3年(1071)以降と考えざるをえない。さらには、その時期は応徳3年(1086)白河院政が始まって後に求めたいと考える。

院政期の政治状況に関しては、日本史学の分野での研究が従来の説を書き改めつつある。白河院と師実の関係は、上東門院と頼通の関係を先例として意識的に継承するものであったとされる。また、養女・賢子の父として白河院との紐帯を結ぶ師実は、従来の摂関に比べて摂関としての正当性がやや弱い。そこで、摂関の補任者である院の権威を向上させ、その院によって任命される自身の正統性を高めることを志向するという。

こうした動きの中で、摂関家嫡流が、摂関

家傍流および他の藤原氏に対抗し、その存在基盤を再確認し直す営みとして、富岡本が作り出されたとの結論に至っている。家の存続と発展が重要視される中で、『栄花物語』本文は新たな価値が付与され、受け継がれていったと考えられるのである。

歴史物語は一旦完結したものであっても、単に受容されるものではない。時代を経た読み手の参画を促す性質を有するものであり、「動態」として存在するものであることが明らかになった点に当該研究の意義があると言える。

〔論文〕

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

小島明子、『『栄花物語』富岡本の成立背景』、『語文と教育』、査読無、30号(掲載予定)、2016、頁未定

小島明子、『『栄花物語』富岡本の改修方向』、『国語国文』、査読有、85巻4号、2016、pp.15-35

小島明子、『『栄花物語』富岡本増補記事の検討 卷二十七~三十に着目して』、『日本文学』、査読有、63巻6号、2014、pp.11-22

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

小島明子、他、新典社、『王朝歴史物語史の構想と展望』、2015、pp.339-356(『『今鏡』後三条紀の叙述意識』)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 明子 (小島 明子)

(KOBAYASHI, Akiko (KIJIMA, Akiko))

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・
教授

研究者番号：60279015

(2) 研究分担者

なし

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし

研究者番号：